# 総合科目「稲作文化論」初年度の経験

農学部　伊　藤　喜　雄

## An Experience of the Lectures on "Civilization in Rice Farming Society"

Yoshio ITO (Faculty of Agriculture)

In this short essay, I will set forth my experience gathered during my deliverance of lectures on "Civilization in Rice Farming Society" as ones of the integrated course in the first term of 1995. Based on the term-end examination and questionnaire survey among the students, the following problems are note-worthy.

Firstly, the teachers scheduled for lectures were as many as seven with different lecture themes having no sound integration among the themes themselves. This caused confusion among the audience.

Secondly, a considerable part of the audience chose the lectures merely for time-schedule's sake with no real interest in the subject matter itself. We encountered difficulties for such kind of audience.

Thirdly, the long and narrow lecture room of 350 seats capacity was so unsuitable that students sitting behind could hardly see the letters written in the blackboard.

From the next term on, I will take necessary remedial measures of the problems mentioned.

**Key words**: Integrated Course, Confusion of audience, Time schedule of curriculum, Unsuitable size of lecture room

## はじめに

農学部は、平成6年度までは「生物資源論」、「緑と土の環境論」という総合科目を提供していたが、平成7年度からは、それに加えて「食の科学」、「稲作文化論」という2科目を開設した。いずれも農学部のスタッフが主体となり、他学部の教員にも応援して頂いて実施したものである。

小稿は、この中の「稲作文化論」についてその経験を報告する。

当初、これらの総合科目の開設計画や担当スタッフの依頼に関して、筆者はタッチしておらず、途中から引継ぐこととなったのであるが、この点は後述するように、若干の反省点をもたらすこととなった。

さて小稿は、「稲作文化論」の総合科目としてのねらいや授業計画、担当者の紹介から始めて、受講学生の概況、受講の事情、授業への評価等について述べ、最後に新年度に向けての改善点を述べて結びとすることとしている。ここで用いた資料は、聴講学生リストや筆者らの採点結果等であるが、とくに大学教育開発研究センターの「平成7年度授業改善のためのアンケート」を活用させて頂いている。記して謝意を表したい。

## 1．授業計画と担当教員

前述のとおり、担当教員の選定と依頼が済んでいたところでこの科目担当を引継いだので、筆者の仕事は、ここに掲げたシラバスの作成から始まった。担当予定教員にそれぞれ2～3行の授業計画のレジュメをお願いするとともに「科目の概要」という前文を書くことがその内容である。

| 講義番号 | 科目名 | 単位 | 学期 | 曜・限 | 担当教員（所属等） | 定員 | 対象学部等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G1050 | 稲作文化論 | 2 | 1期 | 金・4 | 伊藤喜雄(農学部)・他 | 150 | 全学部 |

**〈科目の概要〉**

一昨年の戦後最大といわれる凶作が、昨年は一転して大豊作となる一方で、今年からはガット・ウルグアイ・ラウンド合意に基づく米の部分輸入が始まることとなっている。さらには農家の世代交替と後継者不足のために国内の稲作生産の存続が危ぶまれるという事態がすすんでいる。

このようなことがらは米や稲作の問題をごく短期的な、しかもわが国一国の経済というせまい枠組みの中で考えた場合の問題のたてかたである。

この講義においては、こうした問題を念頭におきながらも、わが国の稲作については歴史をさかのぼって検討するとともに、中国・タイ・アメリカ等の稲作との比較を意図している。又、経済学的手法のみでなく、社会学的手法を用いることによって稲作社会の慣習や伝統、共同組織の意義について考察することとしさらに又栄養学から見た米食文化についても考えることとしている。

**〈授業計画〉**

1～2　日本における稲作生産の展開（伊藤喜雄・農学部）
新潟平野における治水と稲作（　〃　・　〃　）
弥生時代から始まるわが国の稲作について水利開発と社会構造という視角から概説するとともに、とくに信濃川流域下流のケース・スタディをおこなって新潟の土地感覚を養う。

3～4　中国の稲作と農村（伊藤喜雄・農学部、菅沼圭輔・農学部）
革命後の中国稲作について、利水、栽培技術、稲作経済等を取り上げて概説する。とくに1980年代の経済改革以降の農村経済・農民生活の近代化の中での稲作の位置について重点的に論じる。

5～6　アメリカの農業と稲作（小沢健二・経済学部）
農業大国アメリカにおいては、米生産も一つのビジネスである。アジアのそれが永い歴史の上に築かれた“稲作文化”であるとすればアメリカのそれは当初からビジネスとして、しかも輸出を主目的として発展してきた点に特徴がある。この点が講義の中心論点となる。

7～8　タイ農村の生活と文化（佐藤康行・人文学部）
ますます身近かになっている日本とタイ。このタイでは一体、農民は何を作りどのような生産をしているのだろうか。タイ農村の生活と文化について紹介する。

9～10　稲を多産にする祭りの構造と展開（平野孝國・非常勤）
日本の祭りの中核をなす農耕儀礼は、田楽・能・歌舞伎・萬歳・文楽・佐渡の春駒等にまで展開したが、その構造は夫婦和合による多産の原理をそのままに継承している。ビデオにより紹介しつつ講義する。

11～12　人間の食と米エネルギーの構造（小谷スミ子・教育学部）
生命維持の食事ということと、各般の社会生活を営むに必要とするエネルギー源としての食文化と米の関わりについて考える。

13～14　稲作とむらの共同組織（青柳　斉・農学部）
① 明治以降の農村協同組織化の政策展開に関連して、主に農事実行組合、産業組合、農業協同組合の歴史を概観する。
② 機械化以前の稲作のむらの共同組織の意義と、戦後の機械化にともなう集落ぐるみ的な組織化の意義や限界について論ずる。
③ 水田農業における集落を基礎とした生産組織化の現代的意義とその展望を提示する。

15　稲作とアジア的社会（伊藤喜雄・農学部）
ゲルマン的社会と対比されるアジア的社会について稲作を軸として論述する。

**〈成績評価の方法〉**

定期試験

| 使用テキスト | |
|---|---|
| 参考文献 | 講義の際に紹介する。 |

ところで「稲作文化論」は、自然科学系の総合科目群に分類されているが「文化論」というネーミングが示しているとおり、人文科学、社会科学としてのアプローチが主体となっている。自然科学としては、食物学の立場から見た米という講義も2コマお願いしているが、それ以外の10コマ余は、経済学、社会学、民俗学等の文化科学からの講義である。

小麦文化等とともに人類の農耕文化の一つとして稲作文化が、古くから広い地域で行われてきたこと、そしてそれが栽培や品種改良等の自然科学的側面を含みながらも、文字どおり「文化」として、人びとの社会生活や精神生活の基礎となってきていることを理解してもらうこと。それが、この講義のねらいであった。そして、こうしたねらいを達成するために、ここに示したような各学部のスタッフに参加して頂いた次第である。人数の上では、日本研究者が多くならざるをえなかったが、可能なかぎり外国研究を専門にしている人にも参加をお願いした。

この点は、当初きわめて妥当なものと考えていたが、後述するアンケート調査では「担当者が替りすぎてつながりがつかめない」という意見もあって来年度からは一部改めることとしている。又、筆者を除くスタッフには、一率に1人2コマずつお願いしていたのであるが、都合で1コマしかできなかったケースもあった。このことも今述べた学生の意見に反映していると思われる。さらに又、担当スタッフのお1人が停年になられることを知らないでお願いしていたため、講義がスタートしたあとで、非常勤講師の発令で事務局に手数をかける、という一幕もあった。

## 2．受講生の概況と試験の結果

シラバスに書いてあるとおり、当初の学生定員は150人を予定していたのであったが、開講の日には学生が殺到した。350人収容の講義室に入り切れず、講義棟の広い廊下にまで学生が溢れている状況であった。そのため「講義室にすでに座っている人だけは聴講を認める。立っている人と廊下にいる人は聴講をあきらめて下さい」ということでスタートした。

その後、聴講取消の手続きをする者も出ていくらか

## 表－1　聴講者、受験者、合格者の状況

| | | 人文 | | | 教育 | | | 法 | | | 経 | | | 理 | | | 工 | | | 農 | | | 合計 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 95年入学者 | 聴講者数A | 0 | 0 | 0 | 20 | 33 | 53 | 10 | 6 | 16 | | | | 21 | 5 | 26 | 35 | 5 | 40 | 8 | 2 | 10 | 94 | 51 | 145 |
| | 受験者数B | | | | 17 | 32 | 49 | 8 | 6 | 14 | | | | 17 | 4 | 21 | 32 | 5 | 37 | 7 | 2 | 9 | 81 | 49 | 130 |
| | 合格者数C | | | | 12 | 32 | 44 | 8 | 6 | 14 | | | | 13 | 3 | 16 | 24 | 4 | 28 | 6 | 2 | 8 | 63 | 47 | 110 |
| | 受験率B/A | | | | 85.0 | 96.9 | 92.4 | 80.0 | 100.0 | 87.5 | | | | 80.9 | 80.0 | 80.7 | 91.4 | 100.0 | 92.5 | 87.5 | 100.0 | 90.0 | 86.1 | 96.0 | 89.6 |
| | 合格率C/B | | | | 70.5 | 100.0 | 89.7 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | | | | 76.4 | 75.0 | 76.1 | 75.0 | 80.0 | 75.6 | 85.7 | 100.0 | 88.8 | 77.7 | 95.9 | 84.6 |
| 94年入学者 | 聴講者数A | 1 | 3 | 4 | 2 | 3 | 5 | 33 | 7 | 40 | 1 | 1 | 2 | 7 | 7 | 14 | 17 | 3 | 20 | 14 | 4 | 18 | 75 | 28 | 103 |
| | 受験者数B | 1 | 3 | 4 | 2 | 3 | 5 | 23 | 6 | 29 | 1 | 1 | 2 | 4 | 4 | 8 | 6 | 2 | 8 | 7 | 3 | 10 | 44 | 22 | 66 |
| | 合格者数C | 1 | 3 | 4 | 2 | 2 | 4 | 19 | 6 | 25 | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 4 | 6 | 2 | 8 | 7 | 3 | 10 | 38 | 19 | 57 |
| | 受験率B/A | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 69.6 | 85.7 | 72.5 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 57.1 | 57.1 | 57.1 | 35.2 | 66.0 | 40.0 | 50.0 | 75.0 | 55.5 | 58.6 | 78.5 | 64.0 |
| | 合格率C/B | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 66.0 | 80.0 | 82.6 | 100.0 | 86.2 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 50.0 | 50.0 | 50.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 86.3 | 86.3 | 86.3 |
| 93年までの入学者 | 聴講者数A | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 2 | 18 | 2 | 20 | 4 | 0 | 4 | 5 | 0 | 5 | 7 | 0 | 7 | 5 | 0 | 5 | 41 | 3 | 44 |
| | 受験者数B | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 | 1 | 11 | 2 | 0 | 2 | 2 | 0 | 2 | 2 | 0 | 2 | 2 | 0 | 2 | 18 | 1 | 19 |
| | 合格者数C | | | | | | | 2 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 2 | 12 | 0 | 12 |
| | 受験率B/A | | | | | | | 55.5 | 50.0 | 55.0 | 50.0 | | 50.0 | 40.0 | | 40.0 | 28.5 | | 28.5 | 40.0 | | 40.0 | 43.9 | 33.0 | 43.1 |
| | 合格率C/B | | | | | | | 20.0 | 100.0 | 27.2 | 0.0 | | 0.0 | 50.0 | | 50.0 | 50.0 | | 50.0 | 100.0 | | 100.0 | 66.6 | 0.0 | 63.1 |
| 合計 | 聴講者数A | 1 | 4 | 5 | 24 | 36 | 60 | 61 | 15 | 76 | 5 | 1 | 6 | 33 | 12 | 45 | 59 | 8 | 67 | 27 | 6 | 33 | 210 | 82 | 292 |
| | 受験者数B | 1 | 3 | 4 | 19 | 35 | 54 | 41 | 13 | 54 | 3 | 1 | 4 | 23 | 8 | 31 | 40 | 7 | 47 | 16 | 5 | 21 | 143 | 72 | 215 |
| | 合格者数C | 1 | 3 | 4 | 14 | 34 | 48 | 35 | 12 | 47 | 1 | 1 | 2 | 16 | 5 | 21 | 31 | 6 | 37 | 15 | 5 | 20 | 113 | 66 | 179 |
| | 受験率B/A | 100.0 | 75.0 | 80.0 | 79.1 | 97.2 | 90.0 | 67.2 | 86.6 | 71.0 | 60.0 | 100.0 | 66.6 | 69.6 | 66.6 | 68.8 | 67.7 | 87.5 | 70.1 | 59.2 | 83.3 | 63.6 | 68.0 | 87.8 | 73.6 |
| | 合格率C/B | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 73.6 | 97.1 | 88.8 | 85.3 | 92.3 | 87.0 | 33.3 | 100.0 | 50.0 | 69.5 | 62.5 | 67.7 | 77.5 | 85.7 | 78.7 | 93.7 | 100.0 | 95.2 | 79.0 | 91.6 | 83.2 |

は減少したが、学期末での聴講者は、表－1のとおり292人であった。但し、そのうち期末試験の不受験者が77人いたので最終的な受験者は215人ということになった。学生の出席チェックについては、各教員に一任し、とくにまとめていないので、この215人程度が実質的な受講者数と思われる。その内訳は、95年入学生130人、94年入学生66人、93年以前入学生19人であった。又、学部別には、人文学部4人、教育学部54人、法学部54人、経済学部4人、理学部31人、工学部47人、農学部21人となっており、教育学部、法学部、工学部の学生の多さが特徴となっていた。人文学部、経済学部はともに大変少なく、医学部、歯学部はゼロであった。

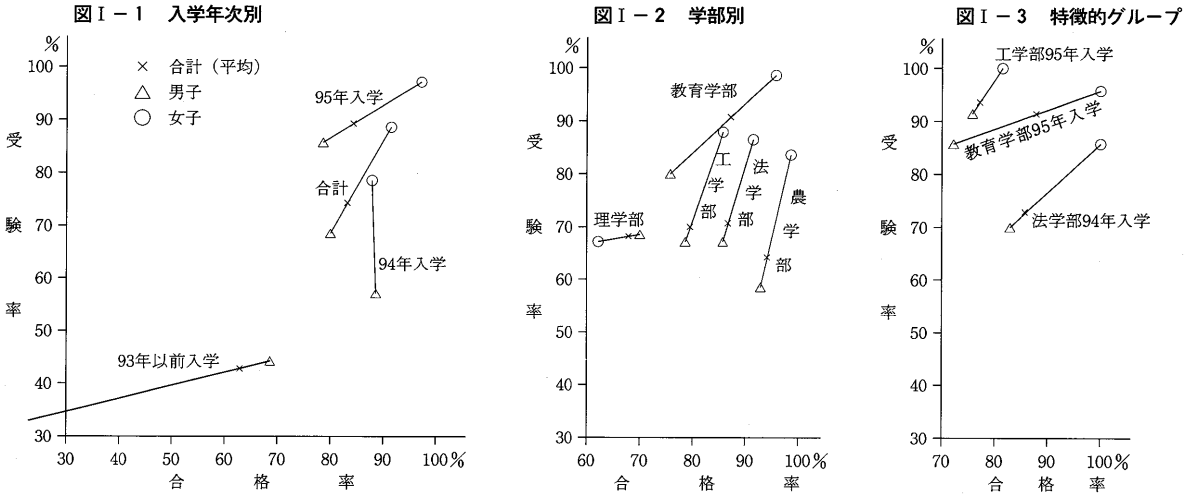
受講者の多い教育学部、法学部、工学部の内訳を見ると教育学部では95年入学生が54人中49人を占め、そのうち32人が女子であるという特徴があった。これに対して法学部は54人中29人が94年入学で半分以上を占め、そのほとんどが男子であった。さらに工学部では、教育学部と同じように95年入学生が大部分であるが、そのほとんどは男子で占められていた。

ところで表－1は、受験者の状況とともに期末試験の結果、すなわち合格の状況も示している。

期末試験は、担当スタッフそれぞれに1問ずつの出題をお願いして、それらの中から2問を選んで回答する記述式試験をおこなった。あらかじめこの試験方法を聴講生に予告しておき、それぞれ的をしぼってまとめておくように指示していたのであるが、結果は表示のとおりであった。なお、採点は1問50点満点としておこない、その結果を筆者が集計して60点以上を合格とした。但し、表で示した合格者数、合格率は、機械的に60点で区分しているが、事務に提出する成績表としては、若干の手心を加えたこともものべておこう。さらに受験者の問題の選び方と、それぞれの人の採点のきびしさ、甘さ、ということも興味ある課題であるがここでは立ち入らない。

表－1の受験率、合格率を見やすくするために作成したのが図－Ⅰ－1～3である。図Ⅰ－1から見ていくと、まず合計の男女平均では受験率73％、合格率83％ということになっている。聴講票を出した者の4分の3が試験を受け、その83％が合格したということである。それも男女別に見ると女子が受験率、合格率ともに90％程度であって、男子の状況をそれぞれ大きく上まわっている。これを入学年次別に見ると、95年入学が受験率ほぼ90％、合格率84％と、それぞれ合計の平均値をかなり上まわっている。そしてここでも女子が格段の好結果を示している。これに対して、94年入

## 図Ⅰ　受験率と合格率




学生は、受験率は64％と低くなっているが、合格率は、男女とも86％ともっとも高い割合を示している。受験率は、男子58％、女子78％と大きな差があるのであるが、合格率に差が見られず、ともに高位を示しているわけである。２年生ともなると試験の受けかたが上手になるということであろうか。

とはいえ、もっと上手になっているはずの93年以前入学者の状況は芳ばしくない。受験率43％、合格率63％といずれもきわめて低く、聴講者としてはやや異質の性格をもつ集団と思われる。なおここでは女子がさらにミゼラブルな位置にあるが、聴講者３人、受験者１人、合格者０という絶対数なので観察対象からは除外してよいであろう。

次の図Ⅰ－２は、学部別の状況を示している。男女平均値の位置から見ていくと、受験率は、教育学部が90％とぬきん出て高く、法、工、理、農の各学部は70％程度で並んでいる。しかし、合格率は農学部が95％とトップにあり、次に法学部と教育学部は88％程度に並び、工学部78％、理学部67％とやや差を拡げている。又、理学部以外の４学部では、どこでも女子の受験率、合格率が男のそれらを上まわっている。とくに受験率は男子よりも20％程度あるいはそれ以上も上まわっている点が注目される。それに比べると合格率の男女差は、教育学部を除くと５～10％程度でそれほど大きくない。教育学部の場合の男女差は、受験率で18％、合格率で23％とともにかなり大きく、とくに合格率の差の方が大きいことが特徴である。

図Ⅰ－３はこのような学部差や男女差を生み出していると思われる聴講生グループをとくに図示したものである。教育学部と工学部の95年入学生および法学部の94年入学生の３グループである。表－１でも示したようにこれらは、人数の多さでも１～３位のグループである。まず教育学部の95年入学生は受験率、合格率ともに90％程度でもっとも高く、工学部の95年入学生は、受験率は教育学部と同じくらいに高いが、合格率は70％台でかなり低い。これにくらべて法学部の94年入学生は、受験率は70％台と低いが合格率は86％と高くなっている。女子の多い教育学部の95年入学生、男子がほとんどの工学部95年入学生、やはり男子がほとんどの法学部94年入学生というそれぞれのグループの性格が、この図にあらわれているのであろうか。なおここで、教育学部と法学部の女子が合格率100％となっていることも注意しておこう。

## ３．アンケート結果に見る授業評価
## ～特掲グループ別の分析～

期末試験の前の週、つまり講義の最後の時間に、大学教育開発研究センターの用意していたアンケート調査をおこなった。ここではその結果を観察しながら、この講義が受講生にどのように受け止められていたかを考えよう。

**表－2　アンケートの回答状況**

| | | 人文 | 教育 | 法 | 経 | 理 | 工 | 農 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 95年入学 | 受験者数 | 0 | 49 | 14 | 0 | 21 | 37 | 9 | 130 |
| | アンケート回答数 | | 39 | 16 | | 19 | 32 | 7 | 113 |
| | 回答率 | | 79.5 | 114.2 | | 90.4 | 86.4 | 77.7 | 86.9 |
| 94年入学 | 受験者数 | 4 | 5 | 29 | 2 | 8 | 8 | 10 | 66 |
| | アンケート回答数 | 4 | 2 | 16 | 1 | 7 | 5 | 7 | 42 |
| | 回答率 | 100.0 | 40.0 | 55.1 | 50.0 | 87.5 | 62.5 | 70.0 | 63.6 |
| 93年以前入学 | 受験者数 | 0 | 0 | 11 | 2 | 2 | 2 | 2 | 19 |
| | アンケート回答数 | | | 4 | 1 | 2 | 0 | 0 | 7 |
| | 回答率 | | | 36.3 | 50.0 | 100.0 | 0 | 0 | 36.8 |
| 合計 | 受験者数 | 4 | 54 | 54 | 4 | 31 | 47 | 21 | 215 |
| | アンケート回答数 | 4 | 41 | 36 | 2 | 28 | 37 | 14 | 162 |
| | 回答率 | 100.0 | 75.9 | 66.6 | 50.0 | 90.3 | 78.7 | 66.6 | 75.3 |

表－2は、アンケートの回答者の状況を示している。聴講者数を届出のとおりの292人とすると、アンケートの回答者は162人であって回答率は55.4％にしかならないが前述のように実際の受講者数を215人の受験者と考えると、回答率は75.3％となる。表－2は、この受験者数を用いてアンケートの回答率を示している。入学年次別で見ると、95年入学生は86.9％、94年入学生は63.6％、93年以前入学生は36.8％と回答率はかなりの差がある。この数値は、ほぼ入学年次別の出席率と考えてよいであろう。

学部別の回答率は、人数の少ない人文学部や経済学部は省くとして、理学部の90.3％を筆頭に以下、工学部78.7％、教育学部75.9％などと続いている。前表で合格率の高かった法学部、農学部は66.6％でむしろ平均以下の回答率となっている。

図Ｉ－3で特掲したグループについて見ると、教育学部と工学部の95年入学生は回答率が高いのに対し、法学部の94年入学生は回答率が低い。前述のとおり前もって2題選択という試験方法の予告をしておいたので、選択回答する教員の分野をしぼってしまえば、あえて毎回出席する必要はない、と考えたのが法学部の94年入学生なのであろうか。

なおこのアンケート調査は、男女の区別をしていないので、前表のような男女の比較はできない。

さて表－3は、この講義を選択した理由を示している。合計では、①の内容に興味をもった51.9％、⑥時間割の関係29.6％⑤簡単に単位がとれそう13.0％、といった回答が示されている。しかしこれを前述した特掲グループ～それらはアンケート回答数もまずまずの多さをもつ～に分けて見ると興味深い選択理由を示している。

**表－3　講義を選択した理由**

| | 内容に興味をもった ① | 指定されていた ② | 専門の関連で必要 ③ | 教養として必要 ④ | 簡単に単位がとれそう ⑤ | 時間割の関係で ⑥ | その他 ⑦ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全学部合計 | 51.9 | 1.9 | 4.3 | 9.3 | 13.0 | 29.6 | 1.2 |
| 教育学部計 | 63.4 | — | — | 9.7 | 7.3 | 19.5 | — |
| 内95年入学 | 64.1 | | | 10.2 | 5.1 | 20.5 | — |
| 法学部計 | 36.1 | 5.5 | 2.7 | 11.1 | 5.5 | 38.8 | |
| 内94年入学 | 50.0 | — | 2.7 | 12.5 | — | 31.2 | — |
| 工学部計 | 32.4 | 2.7 | — | 2.7 | 18.9 | 40.5 | — |
| 内95年入学 | 34.3 | 3.1 | — | 3.1 | 18.7 | 40.6 | — |

まず女子の多かった教育学部の95年入学生は、①内容に興味をもった、が64.1％とほぼ3分の2を占め、⑥時間割の関係、は20.5％ときわめて少ない。これと対照的なのが男子の多かった工学部95年入学生であって、⑥時間割の関係、が40.6％ともっとも高く、①内容に興味をもった、は34.3％と3分の1しかない。又、⑤簡単に単位がとれそうが18.7％もあること、④教養として必要、が3.1％できわめて少ないことなどもこのグループの特徴である。これらのいわば中間にあって合計＝平均に近いのが法学部の94年入学生である。強いていえば④教養として必要、が12.5％と高くなっているが、それほど際立った数値ではない。

ともあれしかし、時間割の関係や簡単に単位がとれそう、という理由で聴講する学生が合せると4割以上もいること、さらにたとえば工学部95年入学生のようにそれが6割ちかくもいることは考えさせられることである。講義のすすめ方や内容の改善について、もっと工夫が必要であるということである。

**表－4　講義の難易度**

| | 全体としてわかりやすかった ① | わかりにくい点もあったが全体としてわかりやすかった ② | わかりやすい点もあったが全体としてわかりにくかった ③ | 全体としてわかりにくかった ④ | その他 ⑤ |
|---|---|---|---|---|---|
| 全学部合計 | 6.2 | 32.1 | 41.4 | 19.8 | 0.0 |
| 教育学部計 | 9.7 | 29.2 | 36.5 | 24.3 | |
| 内95年入学 | 10.2 | 28.2 | 35.8 | 25.6 | |
| 法学部計 | 5.5 | 38.8 | 47.2 | 5.5 | 2.7 |
| 内94年入学 | 6.2 | 50.0 | 43.7 | 0 | 0 |
| 工学部計 | 2.7 | 27.0 | 43.2 | 27.0 | |
| 内95年入学 | 3.1 | 31.2 | 34.3 | 31.2 | |

表－4は、講義の難易度についての回答分布である。合計では、③わかりやすい点もあったが全体としては

わかりにくかった、が41.4%ともっとも多く、つづいて②わかりにくい点もあったが全体としてはわかりやすかった、の32.1%となっている。又④全体としてわかりにくかった、が19.8%とかなりの高率を示していることも一つの反省点である。しかし、これも特掲グループ毎に見ると、やはり興味ぶかい回答分布となっている。教育学部の95年入学生は、①全体としてわかりやすかった、が10.2%でもっとも高いが、反面、④全体としてわかりにくかった、も25.6%と4分の1を占めている。意見分布がよりフラットで幅が広いという特徴を示している。これに対して法学部の94年入学生は、②わかりにくい点もあったが全体としてはわかりやすかった、に50%の回答が集中し、④全体としてわかりにくかった、がゼロであるという特徴を示している。社会科学系の2年生である、という強味があらわれている回答といえよう。

一方、工学部の95年入学生となると、④全体としてわかりにくかった、が31.2%もあり③わかりやすい点もあったが全体としてはわかりにくかった、の34.3%と合せると実に65.5%が、やや否定的な評価となっている。こういう聴講者グループに標準を合せた講義の改善が必要だ、ということであろう。

このことをさらに強く示唆しているのが表－5である。これは「受講の結果、どのようなものが得られましたか」というクェスショニアに対する回答分布である。まず合計で、⑥特に何も得られなかった、が37%ともっとも多いことは、筆者らにはショックである。とくに工学部95年入学生は、この回答が56.2%もあって、講義の不成功ぶりが示唆されている。けれどもそれとは反対に、法学部の94年入学生の場合は、⑥特に何も得られなかった、は12.5%で大変少なく、反対に、⑤教養としての知識や考え方が得られた50%、①興味をもっていた内容に関心が深まった18.7%、と肯定的な評価がきわめて多くなっている。この点を損わずになおかつたとえば工学部の学生にも、何かを得てもらえるような講義が求められているといえよう。

なお、表－5では教育学部生は、おおむね合計＝平均にちかいといってよいが、ここでも⑥特に何も得られなかった、が41.0%とかなり多いことが反省点であろう。とくにこのグループは「内容に興味をもって」聴講した学生が多かったのであるが、その期待には十分には応えられなかった、というべきであろう。

**表－5　講義で得たもの**

| | 興味をもっていた内容に関心が深まった ① | この分野の学問に対する関心が深まった ② | 体系的知識が身についた ③ | 専門の準備として役立った ④ | 教養としての知識や考え方が得られた ⑤ | 特に何も得られなかった ③ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 全学部合計 | 9.3 | 19.8 | 6.2 | 1.2 | 33.3 | 37.0 |
| 教育学部計 | 2.4 | 17.0 | 7.3 | 0 | 31.7 | 41.4 |
| 内95年入学 | 2.5 | 17.9 | 7.6 | 0 | 30.7 | 41.0 |
| 法学部計 | 11.1 | 13.8 | 8.3 | 0 | 44.4 | 19.4 |
| 内94年入学 | 18.7 | 12.5 | 6.2 | 0 | 50.0 | 12.5 |
| 工学部計 | 5.4 | 13.5 | 5.4 | 2.7 | 21.6 | 51.3 |
| 内95年入学 | 6.2 | 15.6 | 3.1 | 3.1 | 15.6 | 56.2 |

## 4．授業の総体的評価

以下の表－6～8は、授業の内容、やり方、様子などについての総体的な評価に関するアンケート結果である。プラスマイナス0（どちらでもない）、あるいは＋（そう思う）のところに多くの回答が集中しているのであるが、いくつかのコメントを加えておこう。

表－6の授業内容にでは、⒁講義の内容は興味あるものでしたか、と⒀講義の中でいろいろな概念や理論がわかるように説明されていましたか、という問いに対して－（反対だと思う）評価がやや多くなっている。この点は、前述した「時間割の関係」や「単位が簡単にとれそう」という選択理由をした聴講生が多かったことの反映と思われる。にもかかわらず、表－7が示しているように⒅黒板の使い方、板書の文字に適切さを欠き、⒇学生の反応を見ながらの講義でもなかったことが多く指摘されている。きびしい批判と反省したい。

板書についていうと、教室が縦長の大きな部屋で普通の、たとえば10センチ角程度の文字では、後方から

表－6　授業内容について

| | ++ | + | 0 | − | −− |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑪講義の主題・テーマが明確でそれにそって進められましたか | 14<br>8.6 | 72<br>44.4 | 62<br>38.3 | 11<br>6.8 | 2<br>1.2 |
| ⑫講義の内容・説明が体系的で整理されていましたか | 6<br>3.7 | 55<br>34.0 | 68<br>42.0 | 24<br>14.8 | 8<br>4.9 |
| ⑬講義の中でいろいろな概念や理論がわかるように説明されましたか | 4<br>2.5 | 46<br>28.4 | 72<br>44.4 | 30<br>18.5 | 9<br>5.6 |
| ⑭講義の内容は興味あるものでしたか | 9<br>5.6 | 51<br>31.5 | 50<br>30.9 | 37<br>22.8 | 15<br>9.3 |
| ⑮講義概要（シラバス）のとおりに進められましたか | 4<br>2.5 | 45<br>27.8 | 92<br>56.8 | 18<br>11.1 | 3<br>1.9 |
| ⑯各回の講義あるいは全体の授業の内容は量的に適切でしたか | 7<br>4.3 | 48<br>29.6 | 75<br>46.3 | 25<br>15.4 | 5<br>3.1 |

表－7　授業のやり方について

| | ++ | + | 0 | − | −− |
|---|---|---|---|---|---|
| ⑰教員の話し方（早さ、声の大きさ、明瞭さ等）は適切でしたか | 9<br>5.6 | 50<br>30.9 | 69<br>42.6 | 27<br>16.7 | 6<br>3.7 |
| ⑱黒板の使い方、板書の文字は適切でしたか | 10<br>6.2 | 21<br>13.0 | 55<br>34.0 | 48<br>29.6 | 28<br>17.3 |
| ⑲視聴覚教材・プリント・教科書等は適切に使用されていましたか | 16<br>9.9 | 51<br>31.5 | 61<br>37.7 | 26<br>16.0 | 8<br>4.9 |
| ⑳講義は学生の反応を見ながら進められていると思いましたか | 2<br>1.2 | 22<br>13.6 | 70<br>43.2 | 39<br>24.1 | 29<br>17.9 |

は判断できないという問題があった。それに気付いた筆者は、20センチ角ぐらいの大きな文字を書くようにしていた。そのためかアンケートの意見欄に、とくに名指しで「文字が大きくて読み易かった」という回答を寄せたものもあった。わざわざこういう意見を書くということは、多くの人が普通の大きさの文字しか書かなかった、ということなのであろう。

⑲視聴覚教材＝ビデオを利用した教員は１人だけであったが、これも教室の前方３分の１程度の学生にはよく見えたのであるが、後方の半分の学生は、何が映っているかわからなかったと思われる。このクエスショニアでは、＋＋（強くそう思う）や＋の回答も多いが、－と－－（強く反対だと思う）も合せて２割余と多くなっており、評価が分れている。縦長で天井の低い教室の構造が問題だったと思われる。ビデオ等を利用する際は大画面で映せる部屋を使う必要がある。

表－８の㉔講義室の状態で、－と－－の回答が合せて３割ちかくもあることも、今のべた点を裏付けている。

表－8　授業の様子について

| | ++ | + | 0 | − | −− |
|---|---|---|---|---|---|
| ㉑教員が講義に熱意をもっていると感じましたか | 19<br>11.7 | 64<br>39.5 | 65<br>40.1 | 14<br>8.6 | 2<br>1.2 |
| ㉒教員が学生の質問を促し、学生の意見に耳を傾けようとしていましたか | 2<br>1.2 | 11<br>6.8 | 92<br>56.8 | 41<br>25.3 | 15<br>9.3 |
| ㉓この講義により、自分の考え方がつちかわれたり、得るところがありましたか | 2<br>1.2 | 57<br>35.2 | 65<br>40.1 | 26<br>16.0 | 12<br>7.4 |
| ㉔講義室の状態や学生数などの環境は適切でしたか | 6<br>3.7 | 46<br>28.4 | 64<br>39.5 | 31<br>19.1 | 14<br>8.6 |

## 5．次年度に向けての改善点

以上に紹介してきた授業と試験の結果および聴講生の受け止め方を参考として、平成８年度には、次のような改善策を講じることとしている。

第１は、「教員が替りすぎてつながりがつかめない」という意見、さらには、筆者を含めて３～４人の教員を挙げて、１人３－５コマ程度の連続講義にした方がよかった、という意見が見られたことを考慮して、スタッフを減らすこととした。１人は、前述したところの昨年停年になった民俗学のスタッフである。この件は、非常勤予算の面で事務からも要望のあったことである。もう１人は、社会学のスタッフであって、これは先方から担当を断ってきたものである。教養教育は全学出動体制で、という原則からすると、担当を断われるのは心外であるが、今のべたとおりスタッフをしぼりたいと考えてもいたのであえて無理には依頼しなかった。

以上、２人のスタッフ、４コマの減少を埋めるものとしては、合計７本、230分のビデオを用意した。「日本の稲作」「農耕の歴史」「むかしの暮らし」「稲作が育んできた食文化」等々の一連のビデオが、たまたま平成７年秋に農山漁村文化協会から発売されたので、これを全面的に活用することとしている。そして

これら4コマは、すべて筆者が担当し、ビデオ映写と必要な解説をおこなうこととしている。もちろん、その時は教室を変えるとともに大型スクリーンを利用したいと考えている。

映像とその説明によって内容をわかりやすくするとともに、筆者の解説によって時代背景や理論的意味を理解させることとしたい。

道具や農機具の発達過程、あるいは用排水改良や農地造成、農道事業等のシリーズもあるので、たとえば工学部系の学生も興味がもてる内容にできると考えている。

これ以外の10コマについては、とくに変更はしないが、たとえば小稿の別刷を担当スタッフに配布して、それぞれに改善の工夫をお願いすることとしている。

第2には、可能ならば150人という定員枠を守って、それにふさわしい講義室を利用したいと考えている。もともと筆者は、社会科学系学部に永く在職して、たとえば2学年合併の4～500人の講義には馴れていたつもりであるが、その場合はそれにふさわしい大講義室を利用していたのであった。天井が高くおおむね正方形の部屋で、板書の文字の大きさなどは気を使う必要がなかった。それに比べると、今年度の講義室はあまりにも条件が悪かったと思われる。

「時間割の関係で」で、平成8年度にも多数の聴講希望者が殺到した場合には、何としても講義室を変更したいと考えている。

第3に、これはまだアイデアの段階なのであるが、フィールドでの講義も考えている。具体的にいえば、新川排水機場の見学である。

シラバスにも書いたとおり、筆者はとくに県外から来た学生に対して、新潟の地理や風土を理解してもらう、ということも考えて、信濃川下流域の水利開発も話すこととしている。新川排水機場は、そのシンボルのような意味があり、これまでもぜひ見学するようにとすすめていたのであるが、今年はこれを講義として実現したいと考えている。さいわい金曜日の4限という時間帯であり、機場は歩いても20分程度の距離なので実現は可能であろう。